

創刊の辞

佐々木 隆爾

ここに「メトロポリタン史学会」の機関誌『メトロポリタン史学』創刊号を世に送る。本誌が、歴史学における知の新星となることを切に願いたい。

「メトロポリタン史学会」は本年四月二三日、創立された。これは本年四月一日におこなわれた東京都立大学の首都大学東京への再編と深く関連している。この再編で史学科が消滅したことは、東京都立大学史学科を拠点として歴史学を築き上げてきた者たちに、伝統断絶の危機を痛感させた。史学科という組織こそ、歴史学固有の方法・研究・教育を保証する基盤であったからである。この再編を前にして、都立大学史学科の学問的伝統の火を消してはならないという声が一挙に高まった。その中から新たな学会を設立しようという運動が起り、「メトロポリタン史学会」として実を結んだのである。

東京都立大学は一九四九年に開学されたが、以来五十数年、本大学史学科は歴史学界の中でユニークな位置を占め、刮目すべき成果を挙げてきた。

都立大学史学科が築いて来た歴史学は、何よりも民衆の視点に立つことを誇りとした。歴史の中の弱者、差別と解放運動、植民地主義と独立運動、戦争と平和運動など、第二次大戦後に本格化したこうした問題群の研究において、本学関係者は先駆的な役割を果たし、多くの成果を挙げ、また有能な研究者を世に送った。この努力の中で、歴史学研究に

歴史と現代の対話という観点を自覚的に導入し、学問としての喚起力・説得力を高めた。

また世界史の視点に立つという立場も、本学歴史学関係者が意欲的に追求したものである。もとより歴史学の研究は具体的でなければならず、実際には一国・一地域・一事象等が研究の対象となるのであるが、世界史の視点に立つとは、それらが他国・他地域・他事象といかに関連しつつ変容・発展するかを誠実に追求しようとする態度であり、そうした変容・発展を世界史創造の一環として把握しようとする問題意識を指している。この問題意識のもとで、関係者は駆使できる言語の範囲を広げ、多様な資料を現地に出かけて入手する等の新しいスタイルを身につけ、実証研究の次元を飛躍的に高めた。こうした活躍は歴史学界に新風を吹き込み、その革新に大きく貢献した。

さらに都立大学史学科の誇るべきことは、朝鮮史・ヴェトナム史・インド史・イスラーム史などアジア研究の分野で開拓者となり、これらの研究のセンターとして分野別研究会の事務局を引き受け、その研究分野を日本に定着させる役割を果たして来たことである。

こうした新しい学問的潮流は多くの人々の共感を呼び、本学史学科に優秀な人材を引き寄せた。私たちは、日本史・西洋史・東洋史・考古学の各分野において開拓者となった人々を教授陣に結集し、ユニークな研究・教育の態勢を築いて来た。この態勢は当然ながら優秀な学生・院生を引きつけ、活力ある大学として魅力を高めて来た。だが私たちは、その分野の「権威」として君臨することを嫌い、むしろ在野の学会で共同者・協力者を育てることに熱意を注いだ。そのため東京都立大学史学会はついに結成されなまま今日にいたったのである。

しかし、東京都立大学史学科の消滅を前にして、新たな史学会の創設をためらうことは許されなくなった。幸いにもこの時期、史学科の消滅を憂い、この伝統を継承・発展させるために新たな史学会を設立しようという声が高まり、史学会結成の機運は熟した。設立準備会の呼びかけに応じて史学会への参加を申し込む人々が相次ぎ、その数はたちまち、会の自主的運営に必要な水準を超えた。四月二十三日の創立総会には、予想以上の参加者を得たが、さらにそこでなされた討議は、史学会の設立がいかに熱烈に待望されていたかを証明して余りあるものであった。これを「メトロポリタ

ン史学会」と名づけたのは、両大学の英文名が共通であることを利用し、東京都立大学史学科の築いて来た伝統を、首都大学東京のもとで自覚的に継承し発展させるようという意気を示すためである。

本誌は、「メトロポリタン史学会」に集う会員の熱意を結集し、学問研究と教育活動の成果を結晶させる役割を果たすために発刊される。「メトロポリタン史学会」は、主旨に賛同する方々に広く門戸を開いている。心ある方々の入会と、本誌が歴史学界に新風を吹き込む発信源となることを期待してやまない。